
退屈じゃない日々

春崎やよい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

退屈じゃない日々

【Nコード】

N9728D

【作者名】

春崎やよい

【あらすじ】

服部たちがやってきた！服部が来た理由とは、親戚の子にあげるための玩具を買ってくることだった。コナンは、少年探偵団を呼び、一緒に買うことになった。それでも、コナンには、大変な日々が続くのであった。ほぼオールキャラです。ドタバタコメディー！ご覧あれ！

その壱

私、毛利蘭。

お父さんが探偵で、お母さんが弁護士なんだ。

そして、幼馴染の新一も探偵。

園子は、たまにお父さんと同じように推理クイーンになるの。

服部君も、新一同様探偵。

あ、そうそう。

一緒に暮らしているコナン君も探偵なんだ。

そうして、歩美ちゃんたちがやっている少年探偵団。

コナン君もその中の一人なの。

少年探偵団は、五人で構成されているの。

団長の小嶋元太くん、円谷光彦くん、吉田歩美ちゃん、江戸川コナン君、そして、灰原哀ちゃん。

子供なのにすごいと思うのよ。

私？

私は、空手会の女王よ。

とりえは、それくらいしかないから
でも、お化けが嫌い。

だって、怖いんだもん。

時々、空手で犯人を捕まえることもしばしば。

私が得意な回し蹴りで一発！

それで、犯人は、伸びるんだ。

自己紹介は、これくらいかな。

じゃ、話を進めていくわね。

その壱（後書き）

まずは、蘭の一人称のお話。
これから、楽しくなります！

その貳

新一がいなくなってから、三ヶ月。

たまに電話を掛けてきたと思ったら、何処にいるのかは、教えてくれない。

「早く帰ってきなさいよ!」

というもののいつ帰ってくるのか、判らない。

それでも、私は、待ち続けます。あなたを^{しんいち}

朝も早いことだった。今日は、土曜日。

こんな時間に電話が来るとは、思っても見なかったことだから

rrrr

「はい、毛利探偵事務所です」

『蘭ちゃん?』

「和葉ちゃん!久しぶり!どうしたの?」

『いきなりで悪いけど、東京駅に迎えに来てほしいんや!今、ここに來ているんや』

「そうなんだ。わかった。今から、行くね」

私は、電話を切り、出る支度をした。

そうだ!

一応、置手紙書いておかないと

私は、電話であつたことを手紙に書いた。

よし!

事務所を出て、東京駅に向かった。

東京駅には、和葉ちゃんと服部君の二人がいた。

和葉ちゃんは、私に気がついて、手を振っているのが見えた。

私もそれに振り替えず。

「蘭ちゃん！こつちや」

私は、二人の前に来た。

「和葉ちゃん、服部君、おはよう」

「おはよう」

「コッコナン君はどないした？」

服部君が聞いてきた。

「私一人だけだよ？まだ、お父さんたち起きていなかったから、私一人出来たんだ」

私は、服部君に言った。

それにしても、なんでともるんだろう？

コナンなんて、すぐに言えるはずなのに

そのことは、触れずにいた。

「探偵事務所に行こうか。朝ごはんまだでしょ？」

「そうなんや。急いできたから、食べてないんや」

服部君が笑って答えてくれた。

「行こうか」

私は、和葉ちゃんと並んで、服部君は、後ろに着いてきた。
自然とそうなる。

私は、和葉ちゃんと服部君を連れて、帰って来た。
事務所に入ると、お父さんがいた。

「蘭か。お帰り」

「ただいま」

「お邪魔しまーす」

私が入ると、後から和葉ちゃん、服部君が入ってきた。

「服部、貴様。なんで、朝早くに来る？」

お父さんは、いやそうな顔をしていた。

「たまには、ええやんけ！」

服部君は、笑っていた。

私は、食事の用意をするため、台所に行った。

七時半にコナン君が起きてきた。

コナン君が事務所に来た。

「コナン君、おはよう」

和葉ちゃんが挨拶しているのが聞こえた。

「うん、おはよう。平次兄ちゃん、来て！」

コナン君は、事務所の外に服部君を連れ出した。

私が聞いていたのは、此処まで。二人が外で何を話していたかは、判らない。

十分くらいで、二人は、戻ってきた。

何を話していたかは、想像つかない。

私は、ご飯が出来たから、コナン君に「早く着替えてきなさい」って、言った。

コナン君は、「うん」と頷いて、部屋に戻って、着替えに行った。

コナン君が戻ってきたのは、五分経ったくらいだった。

結構、早い着替え。

服部君たちと一緒に朝ご飯を食べた。

朝ごはんを食べ終わって、食器を運んだ。

和葉ちゃんが「手伝ってあげる」と言う申し出を受け入れた。

私が洗い、和葉ちゃんが拭く、その動作を繰り返し返した。

「和葉ちゃん、この後どうする？お買い物行く？」

「そっやな。今回は、平次の依頼について来ただけやし。」

和葉ちゃんは、そういつていた。

服部君、仕事なんだ。

だから、和葉ちゃん、東京に着たんだ。私に会うために

私は、嬉しかった。自然と笑っていた。

「あははは！」

「蘭ちゃん？」

和葉ちゃんは、どうしたの？と声を掛けてくれた。

和葉ちゃんに悪いと思ったが、笑いが止まらなかった。

笑い終わり和葉ちゃんにごめんねと謝った。

「でも、急にどうしたん？」

「嬉しくって。服部くんの仕事に付いて来た和葉ちゃんが私に会えるって思ってきたことがすごく嬉しくてね。そうしたら、いつの間にか、笑っていたんだ」

和葉ちゃんは、顔を赤くしていた。

本当に服部君のことが好きなんだなって、羨ましかった。

私も新一のそばにいたら、どんなにいいことが。

早く帰ってきてよ、新一

私は、心からそう願っていた。

「片付けも終わったし、みんなのところに行こうか」

「そうやね」

和葉ちゃんは、いつもの和葉ちゃんに戻っていた。

私たちは、探偵事務所に戻った。

その式（後書き）

蘭の一人称の始まりました。

服部が東京に来たわけとは・・・

次回作読んでください。

そこで、明かされるわけですが・・・

評価のほう、宜しく願いますね。

その参

俺は、江戸川コナン。探偵さ。

朝早くに蘭が事務所を出て行く気配がした。

どうしてかは、知らない。きっと、電話と話していた誰かに呼び出されたんだろう。

まあ、こういうときは、あいつだろうけど

俺は、毛利探偵事務所に居候している身分だ。今は

元は、工藤新一っていう姿だったんだが、ジンって、やつに妙な薬を飲まされてこんな姿になってしまった。

その薬を開発したやつがシェリーこと、宮野志保。今は、灰原哀として、阿笠博士の家に住んでいる。

そいつは、姉の明美さんがジンに殺されて、嫌気が差し、対抗して逃げたって来たってわけだ。

まあ、俺は、灰原のことは、信じている。

話を戻して

俺は、もう一眠りすることにした。

次に起きたとき、蘭が帰ってきていることに気がついた。おっちゃんもいなかった。

たぶん、下にいるんだろう。

俺は、下にある探偵事務所に一回顔を出した。やっぱりいた。

服部お前だったのか、蘭に電話をして、呼び出したのは

「まったく、お前には、呆れるよ。」

和葉さんが挨拶していたので、俺も挨拶をする。

「コナン君、おはよう」

「おはよう」

俺は、迷わず服部を引っ張り出した。

事務所の外に出てきた。

「なんや？工藤」

二人きりになると、こいつは、俺のことを工藤と呼ぶ。

「お前、いきなり来るなって言っているだろう？アポ取ってから、来いよ！」

「すまん。いきなり、母ちゃんに言われたんや。親戚の子に渡さな
いといけないものやから、東京に行って、同じもん買いに行けっ
て！まあ、和葉には、事件やからといってあるけどな」

なんだ、そんなことかよ。

早く買って、帰ってんだ。

服部と話すことが無くなったから、事務所に戻ることにした。

事務所に戻るなり、蘭に「早く着替えてきなさい」と言われた。

ご飯が出来たんだって、わかったんで、素直に「うん」と頷いて、
二階に上がっていった。

すばやく、着替え、下に降りていった。

ご飯の用意がしてあった。

いつもの場所に座り、食べ始めた。

蘭の手料理は、どれも美味しいから、黙って食う。

食べ終わり、蘭たちは、片づけをするため台所に行った。

俺は、服部と話をすることにした。

「服部、さっき行っていたよな？買い物があるって。その買い物っ
て、なんだよ？」

「それか。玩具や！親戚と言っても、子供にあげるものやし、なん
でもいいとちゃう？」

呆れてものもいえねえ。

子供に玩具をあげるために東京に行かされたんじゃ、ただの暇つぶしとしかいえねえよ。

和葉さんも可哀相だな。

あ、そんなことないか。蘭がいるし、退屈しない

「そこでコナン君！なあ、子供にあげるんやったら、何がいい？」

「そういう事は、俺に聞くな。」

「だって、お前今、子供やし。お前に聞くのが一番かよて、きたんやで？おしてゝな！」

あー、うぜー！

知るかよ！そんなこと！

「子供は、他にもいるじゃねえか！」

俺は、怒りに任せて、服部に言っただ。

でも、それが逆効果になるとは、夢にも思わなかった。

「そうや！少年探偵団に聞けばええやんけ！」

げっ！マジかよ

休日にあいつらに会いたくないことは、明白だった。

「コナン君、頼むわ」。連絡してくれへんか？」

きたー！ぜってー、言うと思った。

「しょうがねえな。判ったよ。あいつらに言っておく。聞くの忘れていたけど。お前ら、いつまでいるんだ？買ったなら、すぐ帰らないといけないよな」

「いつでも、ええって。それに玩具は、送っておけって言われた。」

なんじゃそりやー！玩具、送るかふっ？

頭が痛くなりそうだった。

「だから、まだ此処に当分いるわ！」

「そうか」

俺は、それだけ言っただ、横になった。

服部のことは、極力考えないようにした。

まさか、それがトラブルを運ぶとも、思わず

その参（後書き）

コナニー人称です。

服部が東京に來た理由は、親戚の子にあげる玩具を買いにきたのでした。

評価お願いしますね。

次回は、べいかデパートでお買い物です。

少年探偵団が出てきます。灰原も

その四

ところかわって、此処は、べいかデパート。

俺と服部は、二人でお買い物に来た。

もちろん、このことは、蘭たちに言つてある。

和葉さんを騙していたことをちゃんと、服部に言わせた。事件なんて、ないことも

「ったく、お前には、呆れるぜ！」

俺は、服部に目を向けた。

「すまん、工藤」

「それと、歩美たちの前では、工藤は、ダメだぞ！」

「分かっているちゅうに」

服部と話しているときに歩美・光彦・元太・灰原が来た。

なぜ、灰原を呼んだかと言うと、暇そうだったから。

それにたまには、家から連れ出したほうがいいと思ったから。

いつも、家の中にいるよりは、外に出たほうがいいと

「服部にお兄さんだ！おはよう！」

「おはよう」

歩美と服部が挨拶していた。

「なんですか？僕たちを呼び出して」

光彦が俺に聞いていた。

「いやさ、親戚にあげる玩具に協力して欲しくて」

「そういうことか！よし、張り切るぞ」

元太がおー！と一緒に手を上げていうと、歩美たちも後に続いておー！と手を上げた。

はは、付いてけねえわ

そんなこんなで、おもちゃを買いに行くことに決まった。

玩具売り場に着た俺たち一行は、元太・歩美・光彦を先頭にして、

歩いていた。

「玩具を買っただしたら、親戚の子は、何歳なんですか？」

「七歳や。ちょうど、お前らと一緒にやで！」

「でしたら、人気のヒーロー仮面ライダーがいいですよ！子供たちの間では、人気なんですから！」

光彦が言った。

なんでも、いいから早く買って帰ろうぜ！

俺は、協力する気なんて、なかった。

服部は、光彦に言われて、仮面ライダーの玩具を手にして、レジに行った。

「あら？面白くないの？」

灰原だ。

「そうだよ。だいたいなあ、服部が急にきて、こんなことになったんだからな」

「そうね。それでも、結構面白いじゃないの！ちょうどいいわ。私、欲しいものがあったから、買ってくるわね」

灰原は、そう言って行った。

なんなんだ？あいつまで

それにしても、買うものって？

「ねえ、コナン君。哀ちゃんは？」

「買い物だって言って行ったよ。」

「そっか。哀ちゃんが何処に行ったか知らない？」

「たぶん、アイツのことだし、服を買いに行ったんじゃないのか？」

俺は、歩美に言った。

そうしたら、歩美は、「そうだね」と頷いた。

服部が買い終わって、暫くその場で待っていたら、灰原が戻ってきた。

「何、買っていたんだ？」

「薬品よ。補充しておかないとね」

服じゃなかったのかー！

それにしても、薬品って。

こんなところで、そんなもの売っている店あるのかー！
突っ込みたい衝動に駆られたが、黙っていた。

「何はなしているの？」

どうやら、今の会話は、聞こえてなかったみたいだな。良かったぜ！

「みんな買いたいもの買ったみたいだし、帰ろう！」

俺は、そう言つてエスカレーターに向かって歩き出した。

でも、誰も俺の後についてきてくれない。

どうしてだー！

「どうしたんや？くど・・やのうて、コナン君？」

俺は、早く帰りたいんだー！

「俺は、早く帰りたいだけなんだ！俺は、帰るからな！」

俺の体が浮いた

なんだ？

「こいつがどうなってもいいのか？」

何がどうなっているのか、分からない。

上を見上げてみると、覆面した男が俺を抱えていた。しかも、拳銃をこめかみに当てて！

なんだ、警察から逃げてきて、俺を人質に取ったのか。って、分析している場合じゃない！

俺は、こいつから逃げるため拳銃を持っている手に被りついた。
今は、こうして逃げるしかねえ。

思ったとおり、手にかぶりついたら、俺を放した。

そいつから離れ、靴についているダイヤルを回し、サッカーボールを出して、そいつの頭にサッカーを蹴った。失神して、倒れた。

警察は、男を取り押さえて、逮捕した。

「さすがコナン君です！」

ふう、なんとか、収まったな。

コナンたちは、べいかデパートから出て帰っていった。

その四（後書き）

べいかデパートで、玩具を買いました。

そして、灰原も薬品を！なぜか、買わせなかった。

コナンの突っ込み、いいですね。

いや、愉快愉快！

コナンが人質に。でも、逆に犯人を捕まえた。

やっぱり、コナンですね。

今回は、未来です。

タイムスリップします。

それでは、次回お会いしましょう！

その五

次の日に服部たちは、いなかった。
これで、もう何も起こらねえな。
俺は、ふうとため息をついた。

それからと言うもの、コナンは、よく外に出るようになった。
ある日、俺は、見てしまったんだ。
赤ちゃんが町を歩いているのを

「リボーン！待てよ」

「ツナ、来い！」

「十代目！」

ん？

コナンが見たのは、ジャンプで出ているリボーンとツナ、獄寺だった。

なんで、あいつらがいるんだ？

歩いていると、後ろから誰かが走ってきた。

「ランボさんのものだもんね！」

ランボは、コナンにぶつかった衝動で、後ろに倒れた。

ランボの頭から、十年バズーカが出ていた。

コナンは、それを頭から引き抜いた。

まじまじと見ていると、ランボが「それ、俺の！返せ！」と言いだした。

「返すよ」

コナンは、ランボに返した。ランボのまえから去った。
歩いていると、空から何かが降ってきた。

さっき、返したはずの十年バズーカがコナンを覆った。
ボンと音を立てて、コナンは、消えた。

コナンは、なんと未来に送られてしまった。

此処で説明しよう！

十年バズーカに入ったものは、五分間だけ、未来と過去が変わることが出来るのだ！

未来のコナンは、もちろん新一。そう、新一は、現代に来た！
もくもくと煙が立ち込めていた。

新一は、周りをきよるきよる見ていた。

此処が何処だかわかると、灰原のところに行った。

あいつに言わなきゃならねえ事がある！

阿笠邸に来た新一は、玄関のドアをバンと音を立てて、入ってきた。
リビングに灰原は、いた。

新一は、灰原に近寄った。

「あら？工藤君、元の姿に戻れたのね」

「灰原、伝えておく！今すぐ、此処から逃げろ！組織が来る！」

それだけ、言つて新一は、消えた。変わりにコナンがそこにいた。

「あれ？なんで、俺此処にいるんだ？」

周りを見れば、博士の家。

何が起こったかの、判らない。

灰原も急にあわられたコナンにびっくりしていた。

「工藤くん、元の姿に戻ったんじゃないの？」

「何言っているんだ？コナンのまんまだぞ」

未来に行っていたコナンは、森にいた。

そこには、誰一人もいなかった。ただ、棺おけがあっただけ。

その棺おけは、歩美・元太・光彦のもの

その五（後書き）

未来と言うより、未来の^{しんいち}コナンが現代に來たと言う形になりました。そうして、未来では、何があつたのか？歩美・元太・光彦の棺おけがありました。三人は、どうして死んでしまったのか。次回、お送りします。

その六（前書き）

コナンは、ランボの十年バズーカによつて、十年後の世界に飛んだ！
未来に来たコナンは、森に来た。そこには、三つの棺おけがあり・

・

なんと、その棺おけは、歩美・元太・光彦のものだった。

コナンは、必死に考えるのであった

その六

現代に戻ってきたコナンは、阿笠邸にいた。
未来のコナンが灰原に伝えに来た。

『此処から逃げろ！組織のやつらが来る！』

どういうことだ？未来の俺が灰原のところに来たんだ？

さつき、灰原から此処に新一コナンが来た事を聞かされて、コナンは、考えていた。

「で？工藤君は、これからどうするの？」

灰原が言う。

「あの子に会ってくる！」

コナンは、そう言つて、阿笠邸を飛び出した。

「待ちなさい！つたくもう。知らないわよ」

灰原は、ソファの上で、コーヒーを啜っていた。
呑気なもんだ。

コナンは、ランボを探していた。

何処にもいない。

店の前で、ツナがいた。彼だったら、知っているかもしれないと思
い、コナンは、聴いた。

「すいません、バズーカを持っている子知りませんか？」

「バズーカ？十年バズーカだったら、知っているよ。」

「僕、変なバズーカで、未来に行ったんだ。」

ツナは、まさかと思った。

まさにその通り！

そこにランボが来た。

「こら！ランボ、他の人を未来に送っちゃダメだろう！？」

「ランボさんのせいじゃないもんね！」

「つたくもう！すいませんでした」

ツナは、コナンに謝った。

けれど、コナンは、未来で何があったのかを知りたくて、ツナに頼んだ。

「そんなことより、知りたいんだ！未来の僕の仲間が死んだのを！お願い！」

ツナは、おろおろしていた。

「お願いされても・・・」

これだけは、なんともならない。
そこに獄寺が来た。

「十代目どうしましたか？」

「獄寺くん！ちよっと、面倒なことになっちゃって・・・」

ツナは、獄寺に今、あったことを話した。

「そうでしたか。コナン君と言ったね。君、未来のことを知って、どうするんだ？」

「早いときに作戦を立てたいんだ。灰原のためにも！」

獄寺は、腕を組んで、悩んでいた。

「それは、できない。君自身で、やるしかないんだ。それにいつ襲ってくるのかも、わからなんじゃな」

コナンは、うつむいた。

（どうすることも出来ないのか）

コナンは、獄寺に顔を向けた。

「判りました。」

コナンは、それだけいい去っていった。

「（これから、俺たち組織の対決だ！）」

コナンは、これから組織の対決作を練るのだった。

その六（後書き）

ちよつと、難しくなつてしまいました。

この話は、これで完結です。

コナンの行く末、別の話でやろうと思います。

評価のほうをお願いしますね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9728d/>

退屈じゃない日々

2010年10月11日14時19分発行